

博士(文学)学位請求論文審査報告要旨

論文提出者氏名	櫻井 唯
論文題目	初期華嚴教学の形成とその展開
審査要旨	
<p>中国の華嚴宗は、初祖を杜順(557-641)、第二祖を智儼(602-668)とする伝統説があるものの、従来の研究でその流れを定説とはしえないことが、幾つかの観点から論じられている。本論文では、そういった状況を踏まえ、先ず智儼の教学内容そのものの検討を企図し、特に思想の変化に着目して従来説の再考を行った。本論文の根幹がそこにあり、「無尽」の意義に注目して纏めている。そのことを基にして、更に智儼の思想が継承されていく様相を論じ、第三祖と位置づけられる智儼の弟子法蔵の思索的変遷に併せて、智儼の「無尽」思想の継承を探っている。筆者の興味は、草木成仏思想にも及ぶ。加えて、長耳三蔵という異国僧が権威化されていく課程や、慧浄の著作や思想の検討を行ったことも、智儼研究から派生した着想であり、研究領域を拡充した。全体の構成は序論・三篇八章・結論と訳註研究であり、先ず目次を示せば次のとおりである。</p>	
序論	
第一篇 智儼における華嚴教学の形成	
第一章 智儼の著作に関する諸問題 第二章 隋唐における教体論の諸相	
第三章 無尽の思想と華嚴五教の成立	
第二篇 智儼の思想の継承と展開	
第四章 法蔵撰『華嚴経探玄記』と『文義綱目』の成立過程	
第五章 華嚴教学における同体門・異体門 第六章 南都諸宗の草木成仏論	
第三篇 唐代初期仏教の一側面	
第七章 長耳三蔵の思想とその受容 第八章 紀国寺慧浄の著作と思想	
結論	
訳註研究（智儼撰『金剛般若経略疏』）	
<p>序論では先行研究を俯瞰し、本研究の着眼を述べる。そこにおいて、智儼に対する新たな見解を略示した上で、その後の展開や関連事項の解明を課題として掲げたことを記している。</p> <p>第一篇は智儼の華嚴教学を扱うものであり、論文全般を支える基盤となる。先ず、第一章では、二十七歳の著作とされる『搜玄記』や、それより後の『五十要問答』のテキスト研究を行い、更に『金剛般若経略疏』と『孔目章』の成立順序を検討し、前者を先と推定した。これらの四書が、以下における思想変遷を探るための基本書籍となる。第二章では教体論という観点から智儼の思想変遷を検討し、最晩年の著作である『孔目章』において「無尽」を教体とする見地に到達する過程を、地論・撰論学派をはじめとする諸思想から広く分析している。中国仏教における教体論は重要かつ難解なものであり、問題点を絞ったことで結論が明示されたことは高く評価されるであろう。第三章はその題目の示すとおり、「無尽」の思想と、華嚴宗の代表的教判である小乗教・大乘始教・大乘終教・頓教・円教という五教判との関わりを解明する。その五教判の成立を『孔目章』において論ずるに当たり、早期の『搜玄記』からの思索の変化に注目している。すなわち、頓教についての概念が取り上げられ、筆者の言葉に依れば、多元論としての「無尽」を華嚴一乗思想と確定する上で、一元論の枠内にある頓教が三乗教に位置づけられたとする。つまり、頓教の評価が下がったことを説明し、それは如来蔵・仏性という思想を超克するためのものであると言う。一つの着眼であり、一元論・多元論という概念の定義が不十分であることが惜しまれるが、この分類法を提示したことは今後の議論に資するであろう。</p>	

氏名 櫻井 唯 _____

第二篇は、智儼の思想がどのように受け継がれたか、計三章で論じている。第四章では、智儼の弟子法蔵の撰述である『探玄記』二十巻と『文義綱目』一卷という両書の成立過程を考察する。両書の交錯する箇所を指摘を行い、特に『探玄記』巻一が法蔵自身によって改稿された可能性を説示している。そこに東山法門の台頭といった、思索の変化を促す外的要因があったことを指摘するのであり、新たな見方と言えるであろう。第五章で扱うのは、同体門・異体門という華嚴教学独特の思想である。その内容は晦渋であり、本論文では、それぞれの文献における個別的教義を解明するのではなく、大きな流れで捉えている。『一乘法界図』の内容把握や位置づけには若干の問題が残されていると思われるが、その手順によって、解釈そのものというより、そうした把握の仕方が華嚴教学を相承する中で問題になったことが明らかになっている。一つの方法論として有効である。第六章は、日本天台の安然が著した『樹定草木成仏私記』により、南都仏教の草木成仏論を扱い、日本独自の宗派間交流が認められることを指摘した。

第三篇は上来の研究から派生した問題点として、二人の人物像を探っている。第七章は、名前は見掛けるものの、よく分からない人物である長耳三蔵の学説とされる伝承説を分析した。第八章は、慧浄の著作と思想の検討を行った。両章の繋がりとしては、慧浄が異国僧である長耳三蔵の説を活用していることが前提となっている。本論文で中心課題となっているのは智儼の思想解明であるが、智儼に先行する学匠としての慧浄の業績に注目したのである。智儼そのものの研究にも今後の課題は多く、更に進展させていく必要があると思われるが、広い視野の中に研究対象を置くことは一つの重要な観点と言えるであろう。なお、長耳三蔵については、個別の検討としても意義を持つ。

以上のように、中国華嚴宗について、特に智儼に注目して、その前後を含めて論じたことは本論文の成果として評価できる。今後の課題を言えば、智儼の思想分析を一層深めることは必要であろう。また、本論文が、中国仏教での議論を中心にするとしても、アビダルマ・唯識系の文献にも言及が多々なされているので、インド仏教文献に対しては、先ずインド文献それ自体としての意味を正確に理解することも要求される。このことは容易ではないが、努力を期待したい。

本論文は、華嚴教学の綱格が成立する過程を、智儼を中心にして広く中国仏教史という観点から論じたものである。先行研究の再検討を綿密に行った上で、新たな領域を開拓し、従来説の研究水準を進展させているので、博士（文学）の学位を授与するのにふさわしい論文である。

公開審査会開催日	2020年 9月24日			
審査委員資格	所属機関名称・資格	氏名	専門分野	博士学位
主任審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	大久保 良峻	仏教学(日本・中国)	博士(早稲田大学)
審査委員	早稲田大学文学学術院・教授	山部 能宜	インド哲学・仏教学	博士(イエール大学)
審査委員	東京大学名誉教授	木村 清孝	東アジア仏教	博士(東京大学)